

老いの日に

詩編 71:1-24

賈 晶淳

聖書には孤児や寡婦、貧しい人や寄留者への配慮の言葉は多くありますが、何故か老人のことは殆ど出ていません。老人は知恵の人として尊敬されていたからでしょうか。今の日本社会は高齢化が進み、老人が社会的弱者として認識されることも多いです。幸い教会は老人にとって大変重要な居場所になっています。私自身、6月で67歳になりました。前期高齢者として立派に老人を名乗れるようになりました。今日は聖書における老人について一緒に考えたいと思います。

今日の聖書、詩編 71 編の内容は老人の祈りです。希望を失った時にこの詩を繰り返し読むだけでも大切な祈りになると思います。

老人は祈ります。9 節です。

老いの日にも見放さず、わたしに力が尽きても捨て去らないでください。

18 節です。

わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を來るべき世代に語り伝えさせてください。

先ず、聖書における老人について理解するのは二千年以上前のことですのでなかなか難しいところです。ただ、現代の正統派のユダヤ教徒の世界を通じて間接的な理解ができると思います。子どもたちが 18 歳になりますと成人として大人の世界に迎え入れられます。そして、結婚が勧められ、仲人を通して相手を選び、直ぐ結婚をするカップルが多いと言われています。このような生き方はローマによるエルサレム破壊以後、約二千年間をディアスポラ（放浪）としての生活を余儀なくされ、さらに第二次世界大戦中はホロコーストというナチによるユダヤ人迫害に遭ったことで存亡の危機感を常に持っているからだと思います。

最近 2022 年の OECD 国家の出生率が発表されましたが、イスラエルが 2.9 人で断然トップです。聖書の「天の星のように、海辺の砂のように増やす」（創 22:17 他）という神の約束を大事にしているようです。イスラエルの町では若い夫婦が子どもを 2、3 人連れて歩いている姿を良く見かけます。18 歳とは自立ができていない年齢です。結婚をしても暫くは親に依存せざるを得ません。そのような環境では親の言葉は力を得ます。そして、親は 40 代に孫を得、60 代に曾孫を得ることになります。即ち、今の自分の年齢では大勢の孫・曾孫を持つ老人になっているのです。要は私も老いの日について語れるようになったということです。

老いについて考える時に老人を社会的弱者として認める環境になかなか納得が行かないところが多いのではないかと思います。このような理解の裏には疎外の問題があるからだと思います。家庭の中でも老人の居場所がなくなりつつあります。老いとは心と身体が共に弱って行くことで、人との関係も消極的となり、遠慮がちな生活になります。助けが最も必要な時期でもありますが、更に居場所までの消失は生活の安定感までなくしてしまいます。その老いの日のために聖書はどのようなメッセージを残しているのでしょうか。

聖書は老いの日の白髪を非常に肯定的に語っています。例えば、箴言 16 章 31 節です。

白髪は輝く冠、神に従う道に見いだされる。

箴言 20 章 29 節です。

力は若者の栄光。白髪は老人の尊厳。

ヨブ記 12 章 12 節です。

知恵は老いた者と共にあり、分別は長く生きた者と共にあるというが、

聖書の内容をよく見ますと、若者と同時に書かれているのが分かります。要するに、関係性の中で語られているのが特徴です。百人町教会の週報にこの数年続けている今年の聖句があります。そこにも老人と若者が同時に出ています。ヨエル書 3 章 1 節です。

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。

次は詩編 71 編の詩人の祈りについて見てみます。まず、詩人はその生涯に多くの苦難を乗り越えて来たこと、その折々に神に助けがあったことを覚えた上、老いの日における再生を祈っています。20 節、21 節です。

あなたは多くの災いと苦しみをわたしに思い知らせられましたが、再び命を得させてくださるでしょう。地の深い淵から再び引き上げてくださるでしょう。ひるがえって、わたしを力づけ、すぐれて大いなるものとしてくださるでしょう。

そして、詩人は死への不安の中で挫折や絶望を囁く存在を認め敵だと表現しています。そして、その混乱から直ちに助けるように神に祈っています。10 節から 12 節です。

敵がわたしのことを話し合い、わたしの命をうかがう者が共に謀り、言っています。「神が彼を捨て去ったら、追い詰めて捕えよう。彼を助ける者はもういない」と。神よ、わたしを遠く離れないでください。わたしの神よ、今すぐわたしをお助けください。

この敵とは外的存在にも見えますが、それよりさらに怖いのは内なる敵だと思います。自分の弱さを気づかせるものはとても近いところにある訳です。自制心がなくなり、不満が多くなります。神を捨てるようにもなります。

しかし、このような時に詩人はある方法でこの危機を乗り越えて行きます。それは神を讃美することです。讃美は免疫力を高め、混乱という内なる敵を倒します。8 節です。(他 6 節、14 節、22 節、23 節、24 節。)

わたしの口は賛美に満ち、絶えることなくあなたの輝きをたたえます。

また詩人は老いの日にできることを示しています。17 節と 18 節です。

わたしの若いときからあなた御自身が常に教えてくださるので今に至るまでわたしは驚くべき御業を語り伝えて来ました。わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を来るべき世代に語り伝えさせてください。

若い時から語り伝えて来た神の御業、それを老いて白髪になっても次の世代に語り伝えることができますようにと祈っています。

そして、神の御業と関連して「恵みの御業」という表現が 5 回出ています。24 節 a です。(他 2 節、15 節、16 節、19 節。)

わたしの舌は絶えることなく、恵みの御業を歌います。

この箇所もやはり讃美する内容ですが、ただこの『新共同訳』聖書の「恵みの御業」という訳語は、2018 年発行の『聖書協会共同訳』聖書では全て「正義」になっています。言葉のニュアンスは「恵みの御業」が一方的で個人的に読み取れる代わりに、「正義」は双方向的で共同体的に読み取れます。

結論を申しますと、現代社会の焦点は若者に多く充てられています。若者に希望があるから当然かも

知れません。しかし、良き社会とは若者も良く見え、老人も良く見える社会でなければならないと思います。聖書で老いの日に語り伝えようとする「恵みの御業」、即ち「正義」とは若者と老人のどちらかを選ぶ世界ではなく、両者が互いに信頼と尊重を持ち共に生きる世界だと思います。老いて白髪になった人の祈りと讃美する姿はきっと若者の目にも美しく見えるはずです。

終わりにエレミヤ書 31 章 13 節をご紹介します。

そのとき、おとめは喜び祝って踊り、若者も老人も共に踊る。わたしは彼らの嘆きを喜びに変え、彼らを慰め、悲しみに代えて喜び祝わせる。(2023 年 5 月 7 日証詞より)